

## シューマン／交響曲第 2 番ハ長調 Op.61

シューマンの 4 曲の交響曲の中で、第 2 番は必ずしも演奏機会が多い作品ではない。室内乐的な主題法を用い、楽器を重ね合わせて作り出されるシューマンのくすんだ色調の音楽はロマン派らしい心の揺らぎを反映し、時に宗教的な雰囲気醸し出している。交響曲第 2 番の作曲は、まさに精神的な病の克服と復調のプロセスそのものだった。1845 年、ライプツィヒでの音楽活動に区切りをつけて、療養のために静かなドレスデンに移り住んだシューマンは、まず対位法の研究に没頭した。その成果は新しい作曲方法として、まもなく実を結ぶ。シューマン自身の説明によれば、それまでは心の靈感に従って書いていたが、この年以降は頭のなかで作曲するようになった。つまりフーガなど対位法的な書法を凝らしながら、より複雑に展開していく手法が試みられるようになったのである。この年の暮れに、シューベルトの「大ハ長調」交響曲を聴いて強烈な衝動に駆られたシューマンはほぼ 2 週間で第 2 番のスケッチを書きあげ、さらに翌年 1 月に手を加えて、2 月からオーケストレーションを開始した。健康状態は必ずしも良好ではなく、半ば病の状態で筆が進められた。その苦しい闘争と再起が音楽の内容にも影を落としている。第 1 楽章はソステヌート・アッサイの序奏ではじまる。冒頭の金管による 5 度のモチーフが全体を統一するモットーとなっている。アレグロ・マ・ノン・トロツポの主部はソナタ形式だが、第 2 主題部が 3 つの独立した音型をつなげたものとなっていることから、多主題的な音楽に感じられる。第 2 楽章アレグロ・ヴィヴァーチェも第 1 番の交響曲と同じく、2 つのトリオをもつ破格のスケルツォ。コーダで金管によるモットーが現れる。第 3 楽章アダージョ・エスプレッシーヴォはバッハ風の主題によるロンド形式。第 4 楽章アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェは、変形されたソナタ形式に大規模な終結部を付けた特異な形式。最後は勝利を表すように、力強いティンパニの連打とハ長調の和音で閉じられる。

白石 美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

### 楽器編成

フルート 2、オーボエ 2、クラリネット 2、ファゴット 2、ホルン 2、  
トランペット 2、トロンボーン 3、ティンパニ、弦五部 ※スコア上の表